

大障教ニュース

大阪府立障害児
学校教職員組合
大阪市天王寺区
東高津町7-11
府教育会館704号
TEL 06-6765-8904
FAX 06-6765-8905

いまこそ知的障がい支援学校増設の実現を！

「府内各地に知的障がい支援学校の新校整備を求める請願」 署名を大きく広げよう！！



2022年3月、文部科学省は、「公立特別支援学校における教室不足調査」の結果を公表しました。大阪府の不足教室数は全国ワーストの528教室でした。大阪府は、これまで児童生徒数の増加に見合った適切な支援学校の整備を行わず、既存の学校に児童生徒を詰め込み、安易に耐えを行ってまいりました。いまこそ、「府内各地域に知的障がい支援学校の新校整備を求める請願」署名の集約をすすめ、大阪府に抜本的な支援学校整備を求めましょう。

1980年代から続く

「過大・過密」「教室不足」

1970年代、どんな障害があっても高等部での教育を保障しようという保護者や教職員の要求と運動が高まりました。その運動によって、1978年に高等部の入学者希望者全入制度を勝ち取りました。その後、高等部を中心に府内養護学校の在籍人数が急増し「過大・過密」が進行しました。1989年には在籍児童

生徒数の多い学校の全国ワースト10の中に5校が入るなど、全国的に見ても深刻な実態が問題になりました。これらの問題を受けて、大阪府学校教育審議会は、1992年に養護学校の適正規模について、「150人〜200人」との答申を示しました。しかし大阪府は、この答申を受け止めず、1978年に和泉養護学校を閉校後、1998年に守口養護学校(市立から府立に)と吹口養護学校の開校までの20年間、学校を整備しませんでした。その後、「特別支援教育」の流れの中で児童生徒は急増しますが、2013年まで新校整備を行っていませんでした。

学校建設ではなく、場当たりの対応で

「過大・過密」はさらに深刻化

大阪府は、2013年から15年にかけて4校の知的障害支援学校を開校しました。しかし、支援学校整備の規模が限定的であるため、新校に多くの児童生徒が入学することになりました。その結果、西浦支援学校は開校4年日には在籍児童生徒が413人、枚方支援学校も開校4年目で382人になり、開校当初から特別教室を普通教室に転用

全教職員が署名活動に取り組もう

大障教は大阪障害児教育運動連絡会の一員として、大障教の各分會をはじめ、よりよい教育を願う民主団体や労働組合などの協力・共同で運動を広げてください。2018年からとりくんできた新校整備を求める署名は、4年間で11万3657筆を集約し、大阪府議会に提出しました。



文部科学省は、2024年度までを「特別支援学校整備等のための集中取組期間」とし、新校整備や施設改修等に対する国庫補助を3分の1から2分の1に引き上げています。大阪府に對して、いまこそ支援学校の新校整備に踏み出すように迫ることが重要です。府立支援学校で学ぶ子どもたちが劣悪な学習環境



署名用紙裏面
府内で15校の新校整備が必要ですよ

大障教ホームページアドレス <http://fc06631220171211.web2.blks.jp/> Eメールアドレス : fushoukyou_1@mb.biglobe.ne.jp

書記局の FUSHUJU

「教員不足」が重大な社会問題になっています。今年度の大障教定期大会でも、牛野聴覚支援の代議員が職場における代替教員の未配置を取り上げ、「安心して産育休を取得することができる条件整備を」と訴えました。代替教員の未配置は府立支援学校の職場でも常態化しています。文科省は、2021年5月時点で、公立小・979人、中学校722人、高校159人、特別支援205人、計2056人の教員不足を明らかにしましたが、5月以降に代替教員の未配置が増えるため、文科省調査の数値以上に教員不足の状況ははるかに深刻です。

教員不足の最大の原因は、言うまでもなく学校での異常な働き方の問題です。このため、「働き続けられない」と離職が増加し、教育系学部の学生でさえ教職以外の道を選ぶことが増えています。先の生野聴覚支援の代議員は、「学部全体で時間調整を行い代替教員未配置の学年をフォローした」と述べたように、欠員をカバーするための現場の負担が重なり、新たな病休者が生まれるという悪循環が起きています。文科省は今年4月に教員不足の対応策として「教員採用試験の早期化」などを提起していますが、小手先の対応では問題の解決はできません。教員不足の解消のため、教職員の長時間労働の解消は待たなしの課題です。

全日本教職員組合は、10月24日〜30日に全国勤務実態調査に取り組みます。全国3300人、府立支援学校の職場でも約500人が調査に参加します。実態調査によって学校現場の長時間労働を可視化させ、教職員の抜本的な増員、大幅な賃金改善、不要不急の業務や研修の中止・削減、非正規教職員の正規化などの実効ある措置を前進させましょう。(S)

障害児教育を守り発展させ、民主的で働きやすい職場づくり

大障教 職場活動交流会

7月28日、大障教職場活動交流会を開催し、23分会から31人が参加しました。

3年ぶりに開催した今回は、組織の拡大・強化、世代継承をテーマに、「見える分会活動」「分会活動の継承」「組織の拡大・強化」などについて、各分会・専門部からの報告と6つのグループに分かれて分散会で交流しました。



小グループに分かれて交流しました

冒頭、西面執行委員長はあいさつで、コロナ禍で集まるのが難しく、とりくみに制約があると思います。そのようなかでも『見える分会活動』、職場のねがい・要求を吸い上げるとりくみをすすめていこう」と呼びかけました。

つづいて、山内書記長の問題提起の後、3分会・2専門部から指定報告を受けました。光陽支援分会の佐々木さんからは「職場要求アンケート」のとりくみが報告されました。転勤1年目は知らない先生ばかりで、コロナ休業措置などもあり、不安な中、みんなの要求をつかもうとアンケートを実施したことが語られました。アンケートには、「教室不足」「教員不足」をなんとかしてほしいという声や「エアコン設置やトイレ改修などの施設設備の改善」を求め、声など多数寄せられ、それをもとに職場要求書の作成や校長との懇談、対府交渉を行うなど、「見える分会活動」の様子が伝えられました。交野支援四條畷校分会の鈴木さんは、新任で来られた先生方には必ず組合の話をしていって述べ、先日初任の先生との対話で、「7月中にお返事を聞かせて」とお願いした話を紹介しました。「今日、その方から『組合に入らせてもらおうと思っています』と話しに来てくれた」と報告がありま

した。吹田支援分会の田川さんからは長年分会長を担っていた方が退職し、分会長不在で4月を迎えたが、分会の活動を止めてはいけないと組合員一人ひとりと話しをし、みんなで会議出席者や会計、情宣物配布係など役割を分担して、分会活動をすすめること、そのため定期的に集まり、相談していくことを決めたことが紹介されました。青年部の奥さんはオンラインで青年部委員会を毎月開催し、毎回新しい人が参加していると述べました。また、今年は青年部から5人が原水禁世界大会に参加するなど、平和について関心が高いことやスポーツや交流の機会を持ち、「仲間を増やしたい」と決意が語られました。女性部の荒木さんは総会や女性部委員会で、参加者どうしの交流を大切に、「来てよかった」「元気が出た」と思える会議になるようにしていること述べました。その交流の中で悩みや相談が生まれ、それらを女性部の要求



にし、制度の拡充や権利を獲得してきた歴史を紹介、「母性保護の権利取得は職場の民主化のバロメーター、働きやすい職場を築こう」と呼びかけました。

分散会は6グループに分かれて、「見える分会活動」「組織拡大と世代継承」について、それぞれの悩みや工夫していることなどを出し合い、交流を深めました。

2022年原水爆禁止世界大会 広島



参加者の感想 その2

普段、テレビを見て平和やウクライナ危機について考えてはいても、何も行動に起こせないうままでいました。そんな折、原水爆禁止2022年世界大会に参加してみないかと声をかけていただき、一歩踏み出すきっかけにしたいと参加を決めました。

国際会議会場に入ると、熱気に心が震えました。日本の被爆者の方や世界の被爆者の方のお話を聞いて、原水爆の苦しみは77年経った今も、そしてこれからも続いていくものなのだと実感しました。「原爆は人として死ぬことも、人間らしく生きることも許さなかったのです」という言葉が突きささりました。広島と長崎の恐ろしい教訓が記憶から消え去りつつあり、核戦争の可能性が現実になりうるレベルに戻ってきているなか、被爆者の方の言葉を、訴えを、伝承していくこと、自分事として未来を想像することをやめてはならないと思いました。でも世界には、明日を想像することさえ困難な人たちがいます。テーマ別集会「ウクライナ危機を考える」では、ロシアとウクライナの平和活動家の方たちが、日々平和にむけて考え行動していることを知りました。両国にあるプロパガンダ、人権侵害など、メディアの報道がすべてではないことがわかり、自分から知ろうと動き、考えていこうと身を引き締めました。そんな世界全体での平和運動が核兵器禁止条約の発効に実り、大きな風が吹いてきたのだ!と思う反面、どこか私の影響の及ばない世界のことに感じていました。でも、教職員平和のつどいin広島で、若い人たちが核兵器禁止条約締結国会議に参加し、核兵器をなくそうと活動していることを知って、私にもできることはたくさんあるのだと奮い立つことができました。

世界で唯一の戦争被爆国・日本に暮らす私は、どれだけ日本のことを知っているのか。核兵器禁止条約の国連会議会場で日本の席に置かれた「#wish you were here」と書かれた折り鶴、締結国会議にオブザーバー参加もなかったこと、核の傘の下の日本。国際会議に参加した小学生が発言していました。「そんなこと知らなかったし、学校で学ばなかった。どうして先生は教えてくれなかったのだろう。私は帰ったらみんなに伝えようと思います」会場が大拍手に包まれるなか、子どもたちと平和について考え続けていかなければならないと強く思いました。

原水爆禁止2022年世界大会は、小学生の修学旅行以来の広島でした。原爆ドームから空を見上げて想像したこと、平和記念資料館の記録から受けとめたこと、平和記念式典や会場周りの雰囲気を感じられたこと、そして8月6日午前8時15分の広島にいたこと。12歳の私と、26歳の私。同じように胸に刻んだ平和への願いがあり、新たに抱いた平和への決意がありました。どんな戦争であっても人権を侵害し、核兵器は世界を破滅に導きます。平和と愛が決して贅沢品にならないように、自分のできることから平和運動のささやかな風を吹かしたいと思います。被爆者とともに、核兵器のない平和で公平な世界を。(佐野支援学校 北坂 彩華)